

岩手県陸前高田市

牧田貝塚発掘調査概要

昭和46年3月

陸前高田市教育委員会

岩手県陸前高田市

牧田貝塚発掘調査概要

及川 淳

遠藤 勝博

及川 千代松

(特別寄稿)

金子 浩昌

序

陸前高田市内には、先住民族の遺跡の判明している所が30数カ所以上といわれている。

このうち広田町の中沢浜貝塚は昭和9年1月に文部省から史跡として指定をうけている。

最近道路、住宅地の開発が進むにつれこれらの貴重な埋蔵文化財が荒廃され破壊されることをおそれるものである。

これらの遺跡を保存するため、陸前高田市教育委員会は、年次的に調査を進めるため本年は気仙町字牧田の牧田貝塚の発掘調査を実施することになり、考古学に造けいの深い岩手県立大船渡工業高等学校教諭及川洵先生に依頼し、昭和45年8月6日から5日間にわたり調査した。その結果は本文のとおりであるが牧田貝塚の特色は縄文前期全般にわたる遺跡であり誠に貴重な存在であると考える。

本調査にあたった主任の及川先生をはじめ、遠藤先生、及川千代松氏、早稲田大学の金子浩昌先生、また、ご協力をいただいた生徒諸君に対し深く謝意を表します。

昭和46年3月

陸前高田市教育委員会教育長 齋 藤 栄

目 次

序

はじめに	1
1. 貝塚の位置	1
2. 調査の経過	2
3. トレンチの設定及び層序	2
4. 遺物の概要	3
(1) 動物遺骸	3
① 軟体動物 ② 脊椎動物	
(2) 骨角器	7
① 骨針 (a類) ② 骨針 (b類) ③ 骨針 (c類)	
(3) 土器	8
① 第1群土器 ② 第2群土器 ③ 第3群土器	
④ 第4群土器 ⑤ 第5群土器 ⑥ 第6群土器	
(4) 石器	11
① 石鎌 ② 石匙 ③ 不定形石器	
④ 凹石 ⑤ 石皿 ⑥ 丸石	
5. 考察	12
まとめ	14

はじめに

牧田貝塚の調査については、関係者の間では数年前から話がでていたが、なかなか実現できずにいた。しかし気仙地方に縄文時代前期の貝塚で指定遺跡がないことや、牧田貝塚そのものの規模、年代等を知っておくべきである、ということなどから今回の発掘調査が行なわれることになった。

したがって本調査は、緊急行政発掘的な調査とはことなり、貝塚の規模や出土遺物の年代、その保存状態を知り、この貝塚が指定貝塚になりうるかどうかを判定するためのものであった。遺跡を保存するという意味から、トレンチの規模をできるだけ小さくしたために、資料が多く得られなかった点はあるが、三陸地方の縄文前期の貝塚の調査が多くないことを考え合せると、今回の調査は大変有意義であったといわなければならない。

この調査に際し、陸前高田市教育委員会教育長斎藤栄氏をはじめ委員会事務局や市文化財調査員のかたがた、特に文化財係の熊谷宏也氏にはひとかたならぬお世話をいただいた。厚く御礼を申しあげる。なお金子浩昌氏には特に自然遺物および骨角器の分類をお願いし、原稿をお送りいただいた。また今回出土土器の分類でご教示をいただいた興野義一氏の各氏に深く感謝申しあげる次第である。

1. 貝塚の位置

牧田貝塚は岩手県陸前高田市上長部字牧田にあり、3カ所の小貝塚からできている。遺跡の付近の地形は北に横手山（標高335.6m）、西に笹長根山（標高519.9m）、南に不動山（標高475.4m）があってこれらの山裾が海岸まで迫まり、いわゆるリアス式海岸特有の地勢を形成している。遺跡は現在の海岸線、（長部港）から約900m奥まった丘陵上に構成されている。この長部港は対岸の通称広田半島がつき出ているため波面はおだやかで、近くには、名勝高田松原があり、夏は海水浴でにぎわっている。

こうした環境は古くから人間の居住に好適な場所となっていたらしく、広田湾には多くの遺跡が点在している。本遺跡から約1km北へ行ったところに二日市貝塚（縄文前期）、湾の奥まったあたりに、堂の前貝塚（縄文中期）、小友町の門前貝塚（縄文中・後期、に属し小友式あるいは門前式の型式を出した貝塚）、雲南遺跡（縄文前・中期）、獺沢貝塚（縄文後・晚期）、大陽貝塚（縄文前・中期）、中沢浜貝塚（国指定の貝塚、縄文中・後・晚期）など多くの遺跡・貝塚が残っている。

これらの遺跡のうち牧田貝塚にもっとも近い二日市貝塚は、比較的規模の大きい貝塚であるが、住宅を建てるときに整地を行なったりして、破壊されている個所もある。大船渡市立博物館に収集されている同貝塚からの出土土器を見ると、組紐文の施文された縄文前期初頭の土器片、大木1式（羽状縄文、ループ文、不整撚糸文など）、大木2a式（葺瓦状撚糸文、綾絡文など）、大木2b式（S字状連鎖沈文）、その他大木6式および縄文中期と思われる

土器片がある。

また自然遺物は、シカ、イノシシの歯骨類、魚骨はマグロ、貝類としてツメタガイ、ハマグリなどの類が収集されている。

この貝塚は、幾分変更、破壊されている部分もあるが、まだ残っている貝層・遺物から、牧田貝塚との関連や当地方の縄文前期の文化を知る上に必要な遺跡である。後日くわしく調査したいと考えている。

2. 調査の経過

発掘調査は昭和45年8月6日より同年8月10日まで（5日間）実施し、次のメンバーが参加した。

調査主催 岩手県陸前高田市教育委員会

教育長 斎藤 栄

発掘担当者及び調査員

及川 淳（県立大船渡工業高校教諭）

遠藤勝博（県立高田高等学校教諭）

及川千代松（陸前高田市文化財調査員）

松野幸男（県立大船渡工業高校教諭）

調査補助員

大船渡工業高校考古学クラブ

金野丈夫（O B）、釘子克己、熊谷幸洋、加藤正純、中里清、千田正、菊池弘

村上昇二、菅野温、斎藤義徳

高田高校考古学同好会

村上元子、菊池陽子

3. トレンチの設定及び層序

貝の散布は、舌状台地の上部を囲んでみられる。トレンチを3ヵ所に設定した。発掘の結果、A地点では良好な堆積が観察できたが、B、C地点では、いずれも貧弱な貝の堆積がただ一層認められただけである。

A地点

台地東側の耕地に、まず2m四方のトレンチ（A-Iトレンチ）を設定したが、全層が東側に傾斜しており、トレンチの西端では貝層が切れてしまっているので、20センチの幅を残して、東に1メートル50センチ拡張した（A-IIトレンチ）。その結果、牧田貝塚のこの地点では、基本的に8層の堆積が確認された。

第1層は耕土で約15センチ。下部は腐植分が足りないので赤っぽい。表面近くにかなりの

土器片があった。第2層は、貝の混る土層で、東と同時に北に緩く傾き、また北にゆくに従い貝も多く、層も厚い。層中の貝はすべて細かく碎けており、木炭粒も認められる。第3層は、灰の層で、東にゆくにつれ、また北にゆくに従い厚みを増し、東端では10センチ以上、北端でも10センチ近くの堆積があり、異物の混入は殆んどない。第4層は純粹の貝層で、北にゆくに従い厚くなり、北端では10センチ位ある。完全な形を残す貝もあるが、アサリ、カキなどが圧しつぶされ、砕けてしまっている。顯著な出土物はない。第5層は貝が混った土層で、第2層よりはるかに貝が少なく、大きな木炭粒が目につく。この層の貝も米粒のように砕けている。第6層は、純粹の貝層である。南の方は純粹であるが、北にゆくにつれて土が混入し、また南の方では、貝層の下面に灰の堆積が認められる。第7層は黒褐色土層で、土器片が出土している。第8層は無遺物の褐色土層（地山）である。

B 地点

段丘状の畠の、落差の部分に東西1メートル50センチ、南北2メートルのトレンチを設定した。4つの層が認められる。第1層は表土、第2層は、米粒のように砕けた貝を含む土で、厚いところで15センチ位。木炭粒もあった。第3層は木炭粒を含む黒褐色土層。第4層は地山である。

C 地点

A、Bよりかなり離れた耕地の真中に東西2メートル、南北1.5メートルのトレンチを設定した。ここでも4つの層があるだけで、貝層も貧弱であるが、B地点よりは良好である。第1層は耕土、第2層は灰の混った貝層で厚さは約5センチ。アサリが塊状になっている。土器片は極めて少ない。第3層は粘土粒、木炭粒を含む黒褐色土層で、遺物は全くない。第4層は粘土状地山である。

4. 出土遺物の概要

(1) 動物遺骸

牧田貝塚において出土している動物遺骸は、軟体動物22、節足動物・甲殻類2、脊椎動物・魚類4、両棲類1、鳥類2、哺乳類5、計36種類である。

① 軟体動物

出土していた貝種はすべて鹹水産種である。そのうち量的に多いのは、アサリ、レイシ、ヒメエゾボラのようである。外海に近い入江で、岩礁地帯の発達するこのあたりの海岸では、最も普通の種類であり、このような貝類相は三陸地方の貝塚によく見るものである。ただ、貝塚によってスガイが多いとか、イガイが多いといった特徴があって、それぞれの貝塚の貝類相を特徴付ける。本貝塚の場合も、貝層のブロックサンプリングによって、出現率を調査する必要がある。ここでは別表に層位別の種類を列記するに止める。

	A-I 表 土	第 1 层	第 1 混土 貝 層	第 2 層	A-II 第 2 貝層	A-II 第 2 貝層下部	B 貝 層	C 貝 層
I. 軟体動物								
腹足類								
1. イシダタミ			○	○				
2. コシダカガンガラ			○					
3. ヘソアキボガイ			○	○				○
4. スガイ			○	○				○
5. ウミニナ			○	○				
6. エゾタマガイ				○				
7. レイシ	○	◎	○	○	○			○
8. ヒメエゾボラ		◎	○	○	○		○	
9. エゾヨウラク							○	
斧足類								
10. ムラサキンコ				○				
11. イガイ			○					
12. ナデシコガイ				○			○	
13. カキ	○			○			○	
14. ハマグリ				○			○	
15. ウチムラサキ	○			○	○			
16. ヌノメガイ			○	○				
17. オニアサリ	○			○				○
18. アサリ	○	◎		○				◎
19. オオノガイ	○	○		◎	○	○		○
追加								
20. チヂミボラ					○			
21. コタマガイ							○	
22. コベルトフネガイ				○				
II. 節足動物								
甲殻類								
1. アカフジツボ				○				
2. クロフジツボ				○				○

② 脊椎動物

今回の発掘調査で採集された脊椎動物の遺骸のすべては、別表に表示した通りである。遺骸の全量並びに種類の上で、あまり多くのものを得られなかったのは、発掘調査の面積の広くなかったためであり、止むを得ないであろう。しかし陸前高田方面で、幾つもの貝塚が知られていながら、自然遺物について、かつてその内容の明らかにされたことが殆んどない現在、本貝塚の資料は貴重なものといえよう。

III. 脊椎動物

	イ ノ シ シ 破 片	二 ホ ン ジ カ	哺 乳 類	鳥・両棲類	魚類
A - I 表 土	L.前頸骨 (I ¹ ・2) 但 I ² は未萌出 環椎 1	7			マグロ V. 1
第一層 第一混土貝層	R.肩甲骨片 1, 中手or中足骨 5 鼻骨片 1	8	左撓骨遠位部 1 後頭顆片 1, 角片 1 R.大腿骨近位部 1, L.踵骨 1	タヌキ R.上腕骨遠位部 1 キツネ R.上腕骨遠位部 1 ノウサギ R.脛骨 1	マグロ V. 6 マグロ V. L.前上顎骨 ヒメウサギ R.手骨 ヒキガエル スズキ L.歯骨破片 11
第一貝層	下顎骨破片 1		角片 1		マグロ V. 1
第二層 (純貝層)		46	L. P ¹ , R. M ¹ , L. dm ³ L.(dm ³ ・M ¹ ・M ²)但M ² 萌出直後 R.(dm ¹ ~2)但M ¹ の萌出状況不明 L.(P ₁ ~3,M ₁ ~2)但M ₃ は未萌出 角片 2, 距骨		マグロ R.上顎, R.歯骨 2 V. 3・13 破片 51 マダラ R.前上顎 サバ類複椎 1
A - II 第二貝層下部	右頸静脈突起片 1	32*	L.下顎枝 (成獣) 1 L.上腕骨近位 1 (成獣)* R.中手骨近位 1 (成獣)* 脛骨遠位部* 1 R.下頸骨 (M ₂) *, 頭蓋骨片 2*	L.下顎枝 (成獣) 1 L.上腕骨近位 1 (成獣)* R.中手骨近位 1 (成獣)* 脛骨遠位部* 1 R.下頸骨 (M ₂) *, 頭蓋骨片 2*	マグロ V. 4・5 マダラ L.前上顎 スズキ L.歯骨
B 貝		9			マグロ V. 1・10 マグロ破片 1
C 貝					

* : 第2貝層 L・R : 左・右 V : 椎骨, 例 V. 3・12 : 3は腹椎; 12は尾椎骨を示す

哺乳類には、イノシシ、ニホンジカ、タヌキ、キツネ、ノウサギがある。イノシシとニホンジカが多いが、ニホンジカがさらに多い。イノシシは、その歯牙が僅かに1・2の上顎切歯を頸骨とともに得たのにすぎないのでに対して、ニホンジカは上・下顎骨を4個、その他遊離歯も4個ある。

このようなニホンジカの比較的多い出土は、かつて筆者らが発掘調査した大船渡市赤崎町清水貝塚の大木4および大木7a期の貝層において認めることができたが、近時に気仙沼市の貝塚においても同じ様相が確かめられてきている（宮城県鼎が浦高校社会班による調査に基付く）。

しかし、この様相も、三陸地方のさらに外海に直面する地域と、内陸に直接つながる本貝塚のような場合とではさらに違いがあるようである。前者の場合には、さらに漁撈にウエートをかけた生活があったようである（例えば、三陸町綾里宮野貝塚など）。

今後、このような細かい地域差に基付く、生活形態の変異を明らかにしていかねばならないであろう。

なお、ニホンジカの遺骸で、乳臼歯の植立している頸骨、永久歯が萌出していてもM₃の未萌出といった若い個体のものが目立った。おそらく比較的捕獲し易い、このような若い個体がねらわれたのであろう。

タヌキ、キツネ、ノウサギといった中小型の獣類遺骸はごく少なかった。大体、こうした種類は、このあたりでは多くないようである（特に前・中期といった時期の場合）。先述の清水貝塚では、イヌ以外の種類を認めなかったほどである。

鳥類も極めて限られた、外海の鳥であるヒメウ、内陸のキジ、他にやや大型の種類のもの1点という内容である。鳥骨の遺跡による多少は、それぞれかなりの差違があるようである。先述の清水貝塚でも殆んどみることができず、三陸地方ではどうもあまり多くはないらしい。種類の上でも、また数の上でも捕獲し易いものが生息していなかったからであろう。

魚類のなかで目立ったのはマグロである。もっとも標本が大型の椎骨などであるために目立ったわけで、その実際の個体数がどの程度になるかは、かなり問題であろう。頸骨の資料でみる限りでは、マダイよりも少ない位であるが、それだけで決めるわけにもいかないと思う。ともかく、このあたりの貝塚では、大型マグロが特徴的な存在である。

マダイは全部前上顎骨である。前上顎骨全長は、小さいので30.0mm、大型が47.5mm、52.0mm弱である。推定される体長は、小さい方で35.0cm前後、大きい方で55.0～60.0cm位になる。先述の清水貝塚の例では、30.0～45.0mm位の頸骨が多かったが、牧田貝塚のものも、大体この程度の大きさのものが平均してとられていたことになろうと思う。ただ、このあたりの場合は、こうした平均値が、関東地方あたりと比べて少し小さいようである。なお、タイ類の椎骨などは採集されていない。清水貝塚でも、椎骨はごく少なかった。同じようなことは別の貝塚でも見られるようで、何か食法だけではない意味がありそうである。

サバ類は、体長28.0cm位のものの腹椎である。サバは仙台湾岸から三陸にかけて出土の多

い魚である。

(2) 骨 角 器 (第16図)

① 骨 針 a類 (1)

A—I トレンチ、第2貝層中下部より出土。

細い（折れ口で径 3.3×3.2 ）針で、マグロの鰓の骨を材料としてつくられたものらしい。

器が滑らかでなく、低いけれども凹凸がのこっている。

② 骨 針 b類 (4、5)

A—I 第2層(4)およびA—I トレンチ第2貝層(5)より出土。

シカの中手骨あるいは中足骨が材料となってつくられた、やや太い針である。4がやや扁平（基部に近い位置で径 8.0×6.3 ）、5が丸味のある軸（ 7.0×7.9 ）をしているのは、骨の利用部分が違ったからかも知れない。

頂部は、平らたく削られているが、それ以上の加工はみられない。漁扱（やす）のような漁具とみるか、普通の尖頭器的な用途とみるか、一種の装身具とみるか、にわかには決め難い。

③ 骨 針 c類 (2、3)

おそらく骨針の頂部とみられるものの一部である。

i 穿孔と細点列文を付ける：A トレンチ第1層より出土(3)。

ii 穿孔と大きな凹みを付ける：C トレンチ第1混土貝層上面より出土(2)。

i はやや幅広く扁平なつくり（最大幅11.5、厚さ5.8）で、片面につく細凹点列文が特徴的である。凹点列は、4ないし3個の点列が14列並ぶ。反対側は、中央に縦に走る沈線が1本あるだけである。鹿角が材料。

ii は、一そう大きな凹点列が3個縦に走る。その間には、これを整形した際の擦痕が顕著である。頂部を欠いているのが惜まれる。iよりも断面が丸いので幅がせまいが、太くなる（径 8.5×7.0 ）。

牧田貝塚の骨角器は、数こそ少ないが、この地域の縄文前期の骨角器文化の様相を知る上で貴重な資料である。

骨針類のみであったが、いずれも従来あまり知られていない形態のものようである。

骨針類a（マグロの鰓棘利用）の類例はあまりないのでなかろうか。同b類は頂部の加工が特徴的で、従来知られている穿孔あるもの、あるいは自然面をそのまま残すような形態（いわゆる骨角匕）のものとも違う。c類にみる細凹点列文は、東北地方では、時に見かける特色ある文様加工法で、牧田貝塚の例などを考えると、縄文前・中期位に主としてあった方法かと思うがまだはっきりしない。

このような文様を見ると、広く各地にみられる同じタイプの原始文様と共通することを感じさせ、特に北太平洋東岸域の先史時代アメリカンディアンの骨角製品にみる発達した点列文様を思いおこすのである。

（金子浩昌）

(3) 土 器

A—I トレンチ出土の土器は破片159個、A—II トレンチ出土の土器は破片230個、B トレンチ出土の土器は破片96個、C トレンチ出土の土器は破片2個、表土採集24個で合計509個になる。この中にはおおよその器形のわかるものもあるが大部分は破片である。

これらは次のように分類できる。

① 第1群土器（第7図1～9）

胎土に植物性纖維を混入させたいわゆる纖維土器で、前期初頭に位置する土器群である。これらは本遺跡ではもっとも古く最下層の黒褐色土層より出土している。（A—I、II トレンチでは第7層、B トレンチでは第3層から出土している。C トレンチからは出土していない。）底部は1個出土しているが、あげ底で底面まで縄文が施されている（9）。一般に焼成は不良で、色は暗褐色が多く赤褐色のものもある。厚さは7～9mm程度である。特に纖維の混入の多い土器は1、2、5、6、8である。

文様は斜行縄文を中心であるが、その中で次のような施文が行なわれている。4本の縄を組み合わせて作った丸組紐回転文（1、2）や羽状縄文（3）や縄文原体末端を輪にして回転させたいわゆるループ文（4）などがある。口縁部の破片から見て、口縁はゆるやかな波状を呈すようである。内面はヘラ等で整齊しているが整齊のしかたは粗雑で横なでの痕跡がはっきり見られる。これらの中で大木1式の特徴をそなえている土器と、大木1式の時期からややさかのぼるとみられるもの、ややくだると思われるものがあるが、層位的に同じであるので、第1群に含めておきたい。

② 第2群土器（第7図10～20、第8図1～9、第12図）

この土器は大木2式に比定されるものであるが、さらにa類とb類に分けることができる。これらの土器は、A—I、II トレンチでは第6層、B およびC トレンチでは第2層より出土している。

a類（第7図10～15）

胎土に少量の植物性纖維を混入したものと細砂を入れたものとがある。焼成は第1群土器にくらべやや良好で、焼色は10～11が暗褐色、12～14が黒色、15が褐色である。厚さは7、8mmのものが多い。文様は、一般的に縄文の施文に力強さがない。綾絡文が横位に施されたものが多い（12～15）。口縁は波状を呈するようである。

b類（第7図16～20、第8図1～9、第12図）

このb類はS字状連鎖沈文やあるいは連續波状沈文と呼ばれる文様をもつ土器群が中心となっている。胎土はa類と同じく植物性纖維を少量含んでいるものと細砂を混入しているものとがある。焼成は不良なものもあるが（第8図2、3、8）、概して良好である。厚さは4～9mmと違いが大きいが、7mm程度が普通である。文様はS字状連鎖沈文が地文になっている。そのなかで、第7図17・18は口縁に半截竹管文による文様が施されている。19は口縁部文様帯を有しない土器であり、第8図2～5は粘土紐の貼付をもった土器である。この粘土紐の幅は5mm位で刻み目は斜めから押しつぶしている。第8図6・7はS字状とは呼べない。

い、乱れた連鎖沈文となっている。8はたての直線文とよこの山形状沈線から文様が構成されている。9はS字状の沈線やたて、よこ、斜めなどの沈線がある。この8・9の文様は6・7より不規則な直曲線文になっている。第12図は2本の凹線文と貼付文が口縁部に文様として施されており、粘土紐の幅は6~8mm程度である。刻み目は竹状の丸味をおびた器具の側面を上から押しつけて刻みをいたしたものである。口縁はゆるやかな波状を呈している。

以上のa類・b類はそれぞれ大木2a式、2b式の特徴をそなえたものである。

③ 第3群土器（第8図10~19、第13図）

第3群土器の中で胎土に植物纖維を混入しているものがあるがその中で第8図15、第13図は比較的多くの纖維を混入している。焼成はほぼ良好であるが軟調なものもある。文様は、10~15は二重の円文や菱形文が特徴的な文様である。16は細い竹管を押しつけた竹管円文、17~20は地文に斜行縄文をつけ粘土紐を貼付したものである。粘土紐の刻み目は紐に対して斜めから押圧したもの、垂直に押圧しているもの、垂直に押圧しているが斜傾のものがある。第13図は地文に異条斜縄文を羽状縄文様に施文したものである。口縁部は2本の沈線とその沈線の中に刺突を行なった文様が施されている。器形は円筒形で口縁の直径は約16cmである。胎土に植物性纖維を混入し焼成は軟調である。これらは大木3式として分類されるものである。

④ 第4群土器（第9図1~8）

第4群に分類できる土器の出土は多くない。これらの土器は粘土紐を貼付した貼付文グループと鋸歯状沈線文グループに分けられる。胎土は砂粒を混入しており、ざらざらした感じがする。焼成は比較的良好である。1は細い粘土紐の曲線文で、文様を構成し地文は斜行縄文である。器の厚さは8~10mmである。2は口縁上部に貼付されたもので太い粘土紐と細い粘土紐が並列している。3は2本の粘土紐を並列して貼付している。4は2と同じような太い粘土紐の貼付文が口縁につけられている。この貼付文の下には輪積み痕を残している。内面はきれいに整齊されている。5は鋸歯状沈線文が施され、6は口縁上部に貼付した粘土紐がしっかり土器の中にくいこんでいるものである。7は粘土紐を直線及び波状に貼付して文様を構成している。地文は幅の広い撚糸文が施文されている。器形は口縁部が外反し、胴部がわずかにふくらみをもつ。厚さは9~10mmである。8は土器を製作するときの粘土帯をそのままにしているものである。右上部につなぎがみられる。この土器の製作技法は輪積み法ではなく、巻上げ法と思われる。ただし長い粘土帯ではなく、巻上げるのに便利なように、短かいのをつなぎたして作りあげていったものと推定される。以上第4群の土器は大木4式の特徴をそなえていると思われる。

⑤ 第5群土器（第9図9~11）

第5群に含められる土器の出土は少ない。胎土は砂粒が多く含まれている。焼成は良好で、色は暗褐色、赤褐色、黄褐色などである。9は口縁部が肥厚し、上下に切りこみの深い鋸歯状の装飾体がある。これは4群でみられた太い粘土紐の貼付文が形式化し、貼付ではなく、口縁部を部分的に肥厚することにしたものであろうと思われる。細い粘土紐の貼付文が

施されている。紐は波状で口縁部から体部の方にも下って行くようであるが、はがれてい る。地文は斜行縄文が施されている。10は口縁部装飾体の一端がまるくなり、中心に窓があ いたものである。窓の周囲には小さい竹管円文が二重に施文されている。円形の下には粘土 紐の貼付文があり、拓影の右下（口唇）には刻み目がある。なお窓は上方と下方を指で抑え てあけたものである。11は16～18mmの幅の粘土帯を貼付し（貼り合わせたときに生じた沈線 が口縁内面にうすくついている）口縁を厚くしている。この口縁に木もしくは竹（竹の場合 は節のところ）で押圧し2列の円文をつけたものである。地文はたて方向の羽状縄文様に無 節の縄文を施文している。

これらは大木5式に比定できるものである。

⑥ 第6群土器（第9図12～15、第10図1～16、第11図1～7、第14図）

第6群土器は主としてA-I、A-IIトレンチ表土および第1混貝土層から出土してい る。今回の調査でもっとも多く出土した土器群である。焼成は一般的に良好である。全体的に 器形は大形のものが多いようである。口縁は平坦なもの、ゆるやかな波状を呈するもの、 山形になっているもの、この山形の頂上に刻みがつけられているもの（第11図6）などがあ る。また口縁部はゆるやかに外反するものや頸部がすぼみ、つよく外反するものもある。第 9図13は口縁部がつよく内湾している。第11図4は折り返し口縁（複合口縁）になってい る。口縁部や頸部の貼付文では、ボタン状貼付のあるもの（第9図12・14・15、第10図4・ 5）、橋状小把手・いぼ状突起のあるもの（第10図14・16）、棒状貼付（第11図5）や紐状 貼付（第11図4）などがつけられている。口縁部文様帶は半截竹管の外側でひいた太い沈線 で直線、曲線、鋸歯文をしているものや、半截竹管の内側で平行沈線の鋸歯状文を二重に描 いているもの（第10図9）や三重に描いているもの（第10図10）などがある。その他、第9 図14・15は竹管を輪切りにして押した竹管円文が三重につけられている。この竹管円文は体 部にもつけられている。これは本遺跡では第3群土器、第5群土器の中で使われている手法 の一つである。第11図5はD型爪形文の施文をとっている。

体部では半截竹管の平行沈線文が多く用いられ、たて、よこそして斜めに施文してい るが、それがX字状、カーテン状、交差状に描かれている。また第10図8にみられるような鋸 歯文もある。縄文は単節の斜行縄文が多いが横位の綾絡文がついているものもある。（第10図 12、第11図4）

その他、口縁部装飾体において大木5式の様式をはっきり残しているものもある。第10図 12は大木5式で隆盛した鋸歯状装飾体が残っている。これは粘土帯を頸部に貼付し棒状器具 で切り込みをいれ鋸歯状にしている。第11図1は細い粘土紐の貼付を行なっている。貼付は 穴のへり、穴の周囲に鋸歯状に、口縁内部におよんでいる。穴は2つ付き、左側は深くえ ぐっているのみであるが、右側は窓があいている。

第14図の土器は口縁部に14～17mmの粘土帯を貼付し竹状器具の側面を押圧し刻み目をつけ たものである。口縁は4つの大きな山をつくっておりそこにつけられた窓は閉じた状態にあ る。体部は斜行縄文以外に文様は施されていない。

第11図7は底面の拓影で網代文がつけられている。

底部について（第15図）

出土した底部のうち復元し図化ができたものは8個である。1はA—Iトレンチ最下層の第7層黒褐色土層から出土したものである。胎土には纖維が混入されている。底部の直径4cm、あげ底で縄文が施されている。第1群に属するものである。

2はA—IIトレンチ第2貝層中から出土、底部の直径は9cmである。第2群に属する土器である。纖維がわずかに含まれている。

3・4はA—Iの第5層混土貝層から出土している。3は直径6.6cm、4は10.6cmで両方ともあげ底である。

5～7はA—Iの第2層混貝土層、8は第3層の純貝層中より出土したものである。5の底部直径は9.6cm、6は11.2cm、7は11cm、8は11.8cmである。これらは第6群に含められる土器である。

(4) 石 器（第15図）

石器はあまり多く出土していない。合計で11点である。これらは次のように分類される。以下若干の説明を加えたい。

① 石 錘（1）

無茎でえぐり込みのあるものが1個出土している。石質は硅質頁岩である。B地点表土より採集したものである。

② 石 匙（2）

B地点貝層中より出土。破損しているので全体の器形は不明である。一応石匙として分類しておきたい。現在の長さは5cmである。石質は硅質頁岩である。

③ 不定形石器（3・4・5）

3は、石質が頁岩でBトレンチ貝層中より出土。4は泥板岩質のもので、石質はやわらかい。A—Iトレンチ第2純貝層中より出土。先端を鋭く磨いてある。5は粘板岩製である。破損しているので使用法等不明である。B地点表土中より採集したものである。

④ 凹 石（6・7）

7は花崗岩製である。表面にくぼみが3つ続いている。裏面にもくぼみがあるが使用痕かどうか明瞭ではない。A—Iトレンチ第2純貝層から出土したものである。6は石質は砂岩である。使用中にこわれたものと思われる。表裏に深いくぼみがある。Bトレンチ第2層から出土したものである。

⑤ 石 皿

石質は砂岩で、大きさは石にゆがみがあるので正確に計測できないがおおよそよこ14cm、たて12cm、高さ9cm（皿のへりまで10cm）である。出土の状態はBトレンチ黒褐色土中（第3層）に埋められていた（PL10参照）。

⑥ 丸 石

全部で3個出土している。A—Iトレンチ表土中より2個発見されている。このうち1個

は棒状型のものであり、頸部には打痕がある。他は小判型である。もう1個は第3層の大木6式と併出した。小判型のやや大きめのものである。これらは磨石とも考えられるが、使用法など不明なので丸石として分類しておきたい。

5. 考察

以上牧田貝塚発掘についての概略をのべてきたのであるが、総合的に考察を加えてみたい。

本貝塚は土器編年的にみて、ほぼ縄文前期全般にわたっている。これをくわしくみていいくと、A—IトレンチおよびA—IIトレンチにおいては貝層が4層に堆積しており、下層は出土土器分類の第2群になる時期であり、上層の貝層は第6群に属している。Bトレンチ、Cトレンチは貝層は一層のみであり、その時期は第2群に属する時期である。ただ時間的経過を考慮して考えるならば、A・Bトレンチ最下層（黒褐色土層）から前期初頭の土器が出土したことが容易に理解でき、またAトレンチの下層純貝層（第6層）と上層の貝層（第2層）の間に少量ではあるが各群の土器が出土しているのも理解できるのである。

さて第1群土器の中の組紐文は大木1式よりやや古い時期のものといわれる。それは、撲糸文・竹管文・羽状縄文等を特徴とした室浜式から、組紐文を特徴とした土器群を経て、羽状縄文・ループ文を特徴とする大木1式へと考えられるという（注1）。この組紐文に続く土器は3・4の羽状縄文やループ文の大木1式土器であるが、大船渡市清水貝塚出土の第1類土器は、本地域における前期初頭の新形式として考えられる土器であるという（注2）。その内容は、器形はあまり変化のない円筒形で、文様は縄文と撲糸文である。胎土には多量の植物性纖維を含有しているとされるが、土器を見る機会がなく、比較検討ができないのは残念である。ところで当地方において前期初頭の土器を出土する遺跡は、陸前高田市では二日市貝塚（注3）、垂井が沢遺跡（注4）、大船渡市では前記清水貝塚・関谷洞窟（注5）などがあるが、遺跡数はそれほど多くはない。

次の第2群土器は大木2式に比定される土器であり、A—I・IIトレンチでは第6層の純貝層を主とした層から出土し、B・Cトレンチでは第2層から出土している。この2群土器はa類とb類に分けて考えられるのであるが、a類土器は出土数も多くなく、横位の綾絡文の施文された土器が出土しているというだけにとどめたい。しかし b類土器は出土が多い。中心的な文様はS字状連鎖沈文であるが、その中に半截竹管文による施文、粘土紐の貼付文などがみられる。またこの時期に不規則な直曲線文による施文も行なわれている。第3群土器は、第2群 b類の流れをくむ文様、すなわち二重円文や菱形文や竹管円文の特徴を有する類と縄文に貼付文を施した文様構成をもつグループになる。なお本地域では胎土に植物性纖維を混入する手法は第3群土器（大木3式に比定される土器）までである。

第4群土器は、大木4式の特徴をもつ土器で清水貝塚では第4類にあたるものである。特徴は粘土紐を貼付した文様をもつものと鋸歯状沈線文を文様としたグループに分けられる。

この特徴は次の第5群土器に影響を与えている。本遺跡ではこの群に属する土器は少数であり、多く論することはできないが、第9図9は口縁部の一部が肥厚し装飾体となったものである。また10は興野義一氏のご教示によれば、環状装飾体に刺突を加えた前半形式に属するものであるといわれる（注6）。11は10の後続する文様として理解される。

次の第6群に属する土器は大木系の諸地域から多くの出土を見ている。清水貝塚、蛸の浦貝塚（注7）、気仙沼市大島磯草貝塚（注8）、水沢市中島遺跡（注9）、宮城県登米郡糠塚貝塚（注10）、登米郡長者原遺跡（注11）、涌谷町長根貝塚（注12）などにおいて調査が行なわれ、その結果が公表されている。それによると、例えば中島遺跡ではA、B、C、D式に分け、このうちAとBは年代の相違として設定している。また糠塚貝塚では糠塚Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ群を糠塚式とし、大木6式と7a式の中間に置くことを提案している。長根貝塚では3群に分けられ、第1群土器を大木6式とし、第2群を大木6式では新しい様相をもつ土器群であろうとしている。第3群は第1類から第6類までに分類しているが、第1類から第4類までは出土状況等から同一型式と考え、第5類は他の第3群土器と一緒に出ているとし、第6類については、しばしば五領台系土器と称される類である。これを他の第3群土器よりも新しいと考える説もあるが、層位的には同一に考えてよいとしている。そしてこれら第3群土器を大木6式とも糠塚式とも称することができないと結論している。

本遺跡出土の土器は、長根貝塚の例では、第1群土器、第2群土器および第3群は第3類までの土器に類似するものがある。しかし第3群第4類から第6類までの土器は出土していない。調査範囲が広くないので出土数も多くなく、傾向を知るに過ぎないが、変遷過程には見るべきものがある。すなわち竹管を使用し、数条の沈線、竹管円文や半截竹管の平行沈線、鋸歯文、瓜形文などで、その施文法に新旧の差異がみられる。しかし時間の流れをどこで切るかについては非常にむずかしい。大木7a式土器については詳細な発表がないので明らかではないが、口縁は平坦なものと波状を呈するもの、橋梁状の把手、折返し口縁の形状、爪形文、平行線文、沈線文、刺突文、鋸歯状文などの文様を有し、関東地方の下小野式、五領ヶ台式にみられる手法を含み地文は1・2段の縄文、結節文が施されているとされている（注13）。本遺跡にはこれらの特徴の多くを満足させる土器が出土していない以上、縄文中期初頭のものは出土していないといいう。したがって本遺跡の第6群は前期末葉の大木6式の特徴をそなえた土器群といえる。

以上によって本遺跡は出土土器の編年によって縄文前期の全般にわたっているといえる。

次に自然遺物についてであるが、金子氏が述べているように、本遺跡は外海に近い入江で、岩礁地帯の発達している海岸の近くにあり、出土した貝類も最も普通の種類である。これらは三陸地方の貝塚によく見るものであるとしている。また魚骨については、マグロ、マダイ、スズキ、サバ類が出土しているが、今回の調査では骨角器等の漁撈器具は明らかではなかった（注14）。

石器については、生活の場を示唆する凹石や石皿や磨石の出土を見ている。今後の調査に期待したい。

ま と め

- 1、本遺跡は縄文前期初頭より末葉にいたる時期に形成された貝塚である。
- 2、出土遺物の内容は、土器は大木式の様式を強く受けている文様で、自然遺物においては同時代の三陸地方の遺跡にみられるものである。
- 3、遺跡は畑作などで若干攪乱されている場所もあるが、保存状態は良好である。
- 4、以上から本遺跡は縄文前期の貝塚として指定保存するに適した遺跡であるといえる。

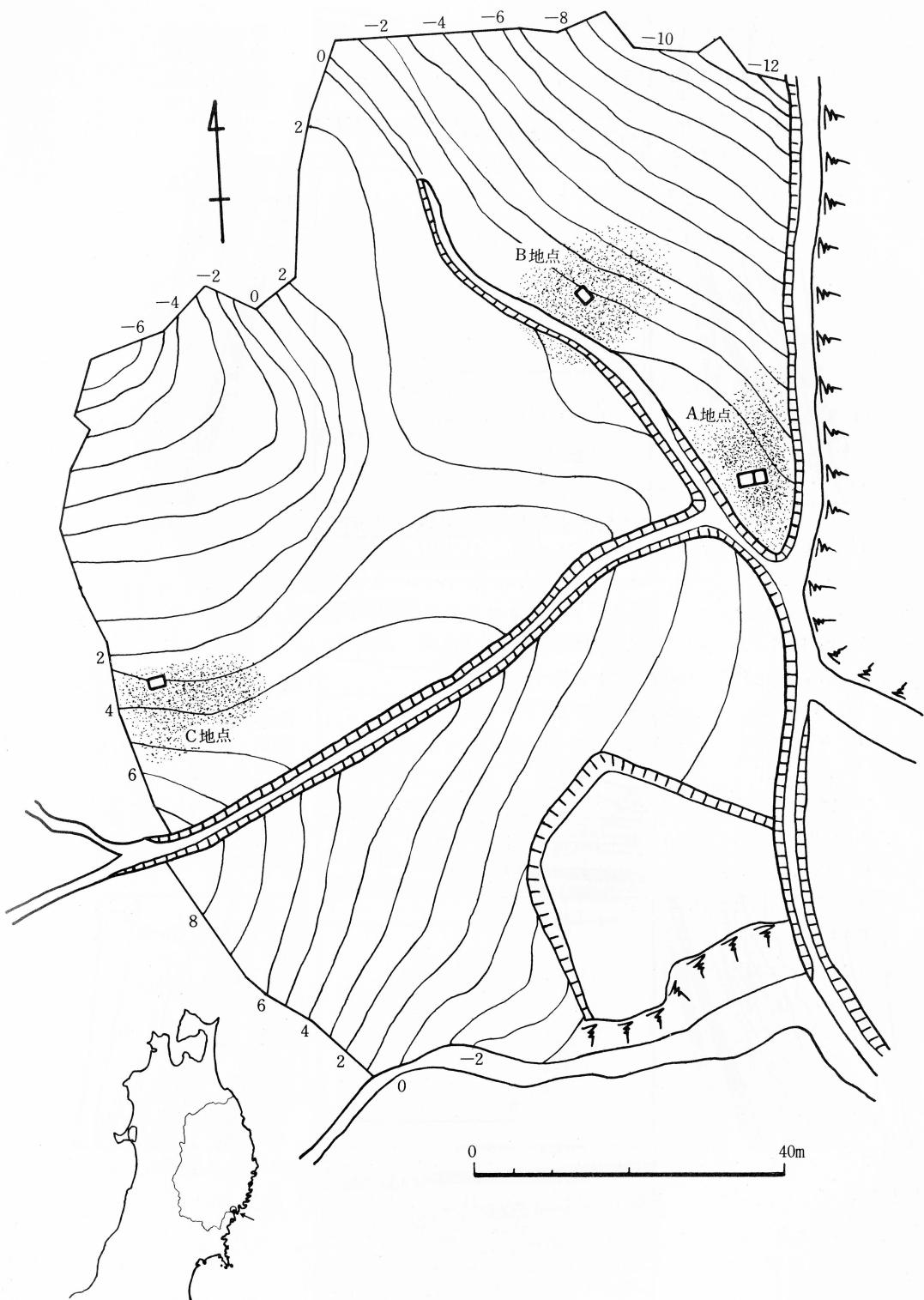
注：

- (1) 「平田原貝塚」貝輪5号別刷、宮城県塩釜女子高等学校社会部
 - (2) 西村正衛、菊池義次、金子浩昌「岩手県大船渡市清水貝塚」社教シリーズ別冊(1)、大船渡市教育委員会
 - (3) 大船渡市立博物館に保管されている資料による。
 - (4) 垂井が沢遺跡は防火水槽工事のさい発見された。土器は及川千代松氏により数十点採集されている。
 - (5) 後藤勝彦、及川洵、山口興典「関谷洞窟」大船渡市教育委員会(昭43)
 - (6) 興野義一氏のご教示による。なお氏は長者原遺跡出土資料により前半を大木5a式、後半を大木5b式として設定されている。(「大木5b式土器の提唱」古代文化第22巻第4号)
 - (7) 西村正衛「蛸の浦貝塚」大船渡市教育委員会(昭33)
 - (8) 高倉淳「宮城県気仙沼市大島磯草貝塚出土の土器について」仙台湾周辺の考古学的研究所収(昭43)
 - (9) 草間俊一他「中島遺跡」水沢の原始古代の遺跡、水沢市教育委員会(昭40)
 - (10) 小笠原好彦「東北地方南部における前期末から中期初頭の縄文式土器」仙台湾周辺の考古学的研究所収(昭43)
 - (11) 興野義一「大木式土器理解のために」V考古学ジャーナルNo.48
 - (12) 伊東信雄他「遠田郡涌谷町長根貝塚調査概報」宮城県教育委員会(昭44)
 - (13) 西村正衛「縄文中期文化—東北地方—」考古学講座3、雄山閣(昭44)
 - (14) 及川千代松氏は以前に無鏃(アグのない型式の)釣針を1個収集している。
- (参考)
- 興野義一「大木式土器理解のために」I～VI考古学ジャーナル
「岩手県史」第1巻(昭36)
「宮城県史」1(昭32)

(付記)

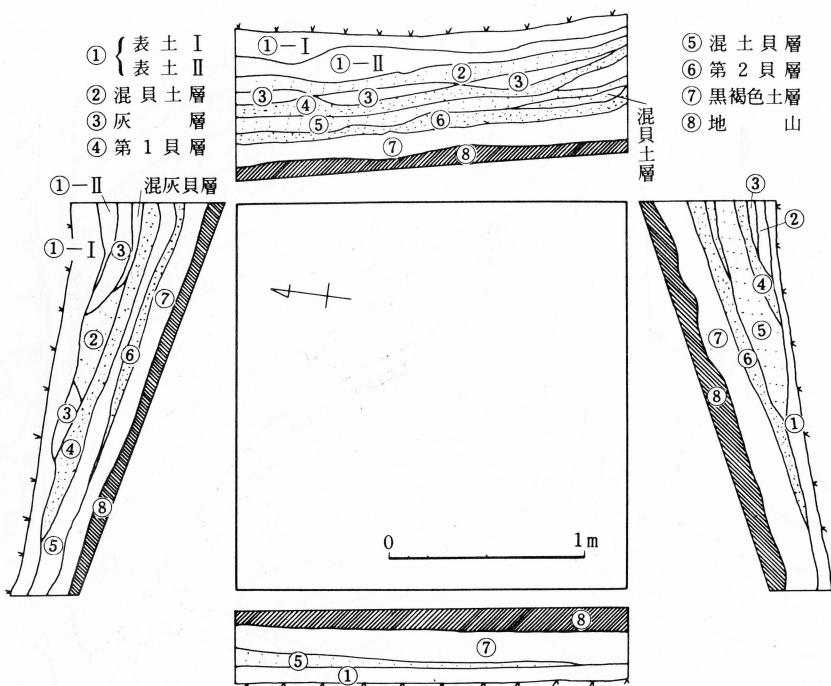
稿を終えるにあたって、牧田貝塚の近くに住んでおられる菅野栄三氏の表面採集した土器類を参考にした。同氏に感謝申しあげたい。また遺物の整理はクラブ員が協力してくれた。図面の作成は熊谷幸洋、加藤正純、中里清、熊谷君夫の諸君の協力を得た。記して感謝の意を表したい。

出土遺物は陸前高田市教育委員会により市立博物館において保管、展示される。

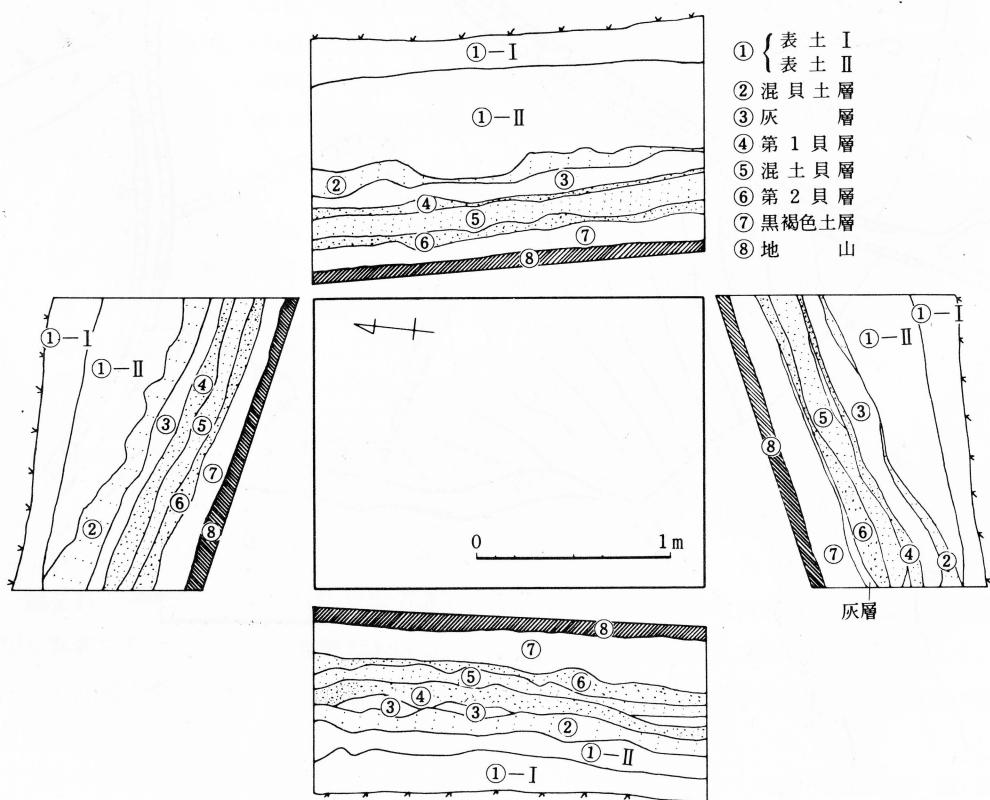


第1図 陸前高田市の位置

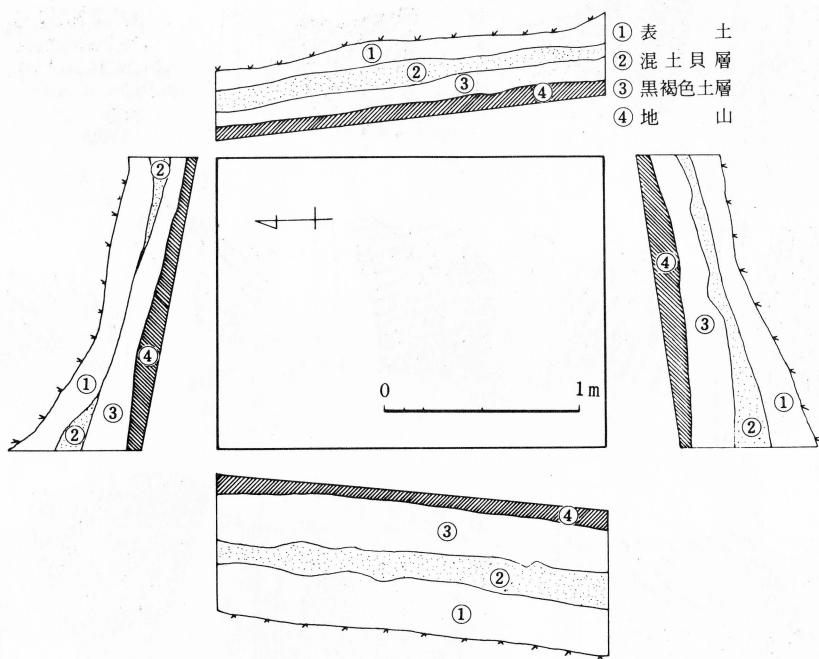
第2図 牧田貝塚実測図



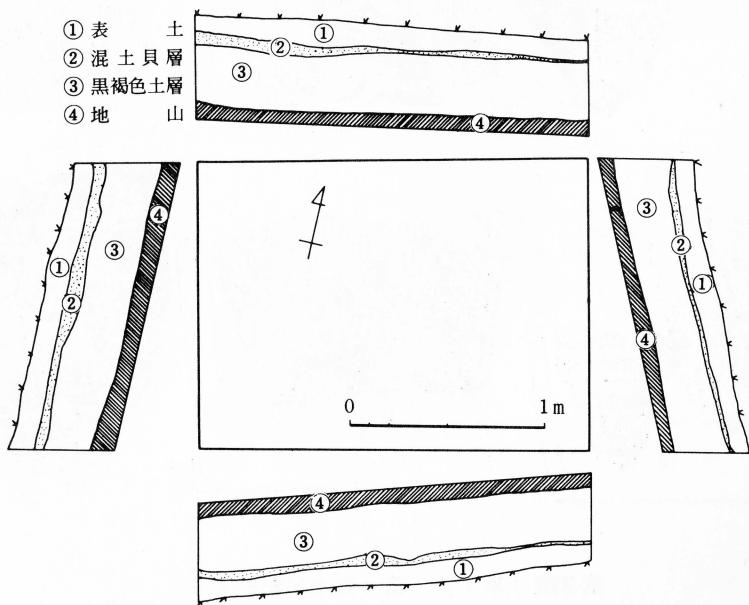
第3図 A—I トレンチ壁面実測図



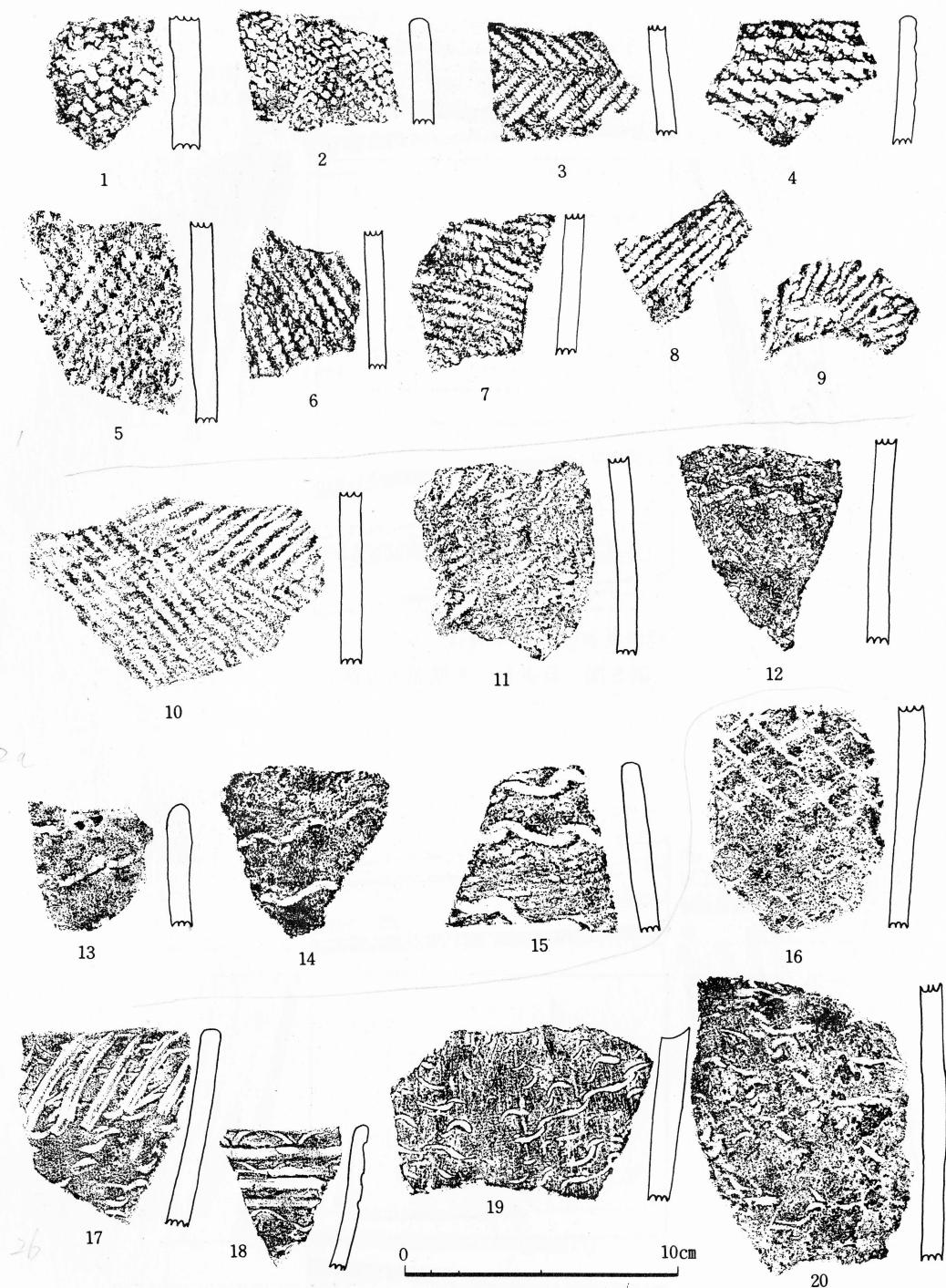
第4図 A—II トレンチ壁面実測図



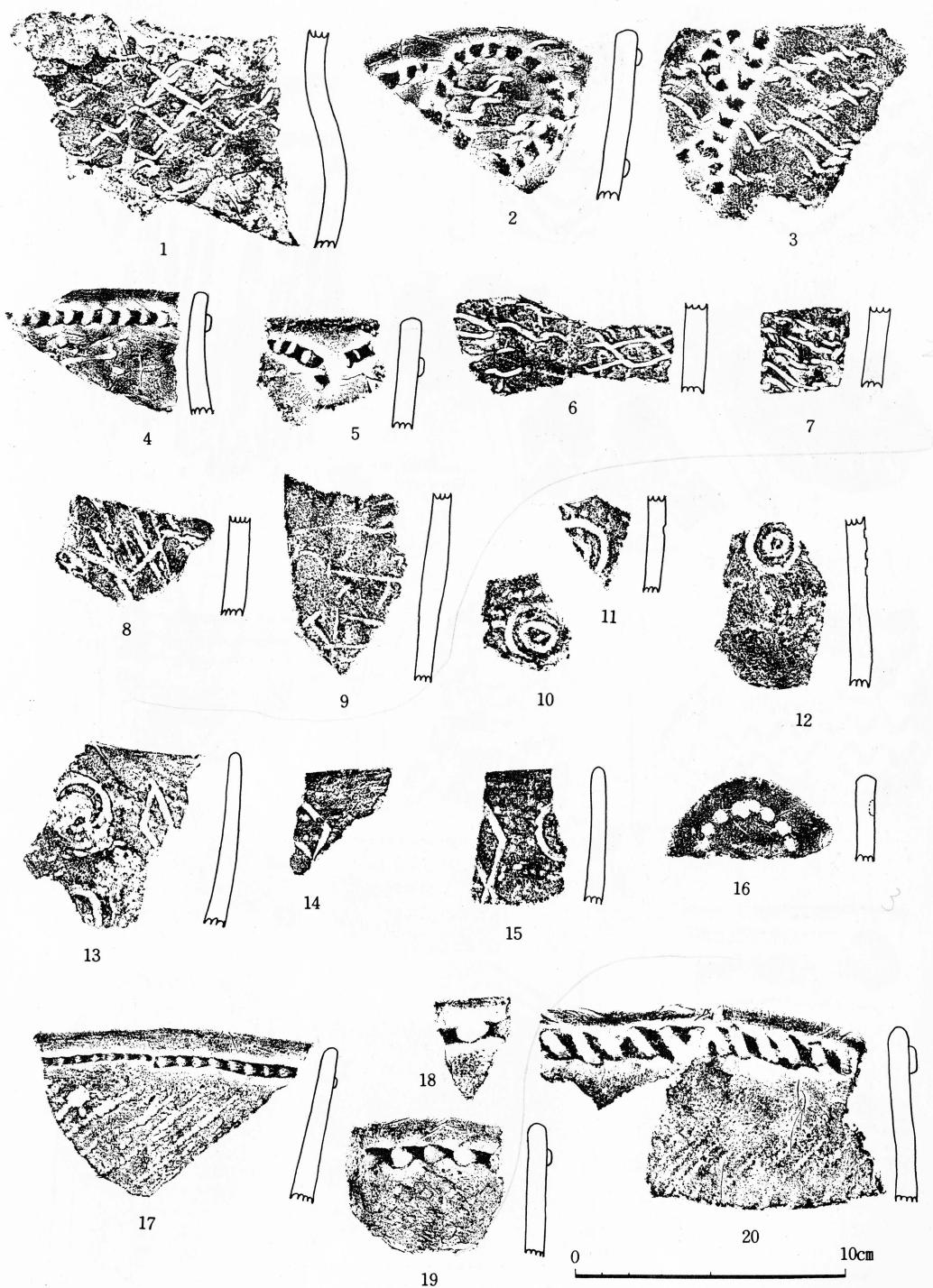
第5図 Bトレンチ壁面実測図



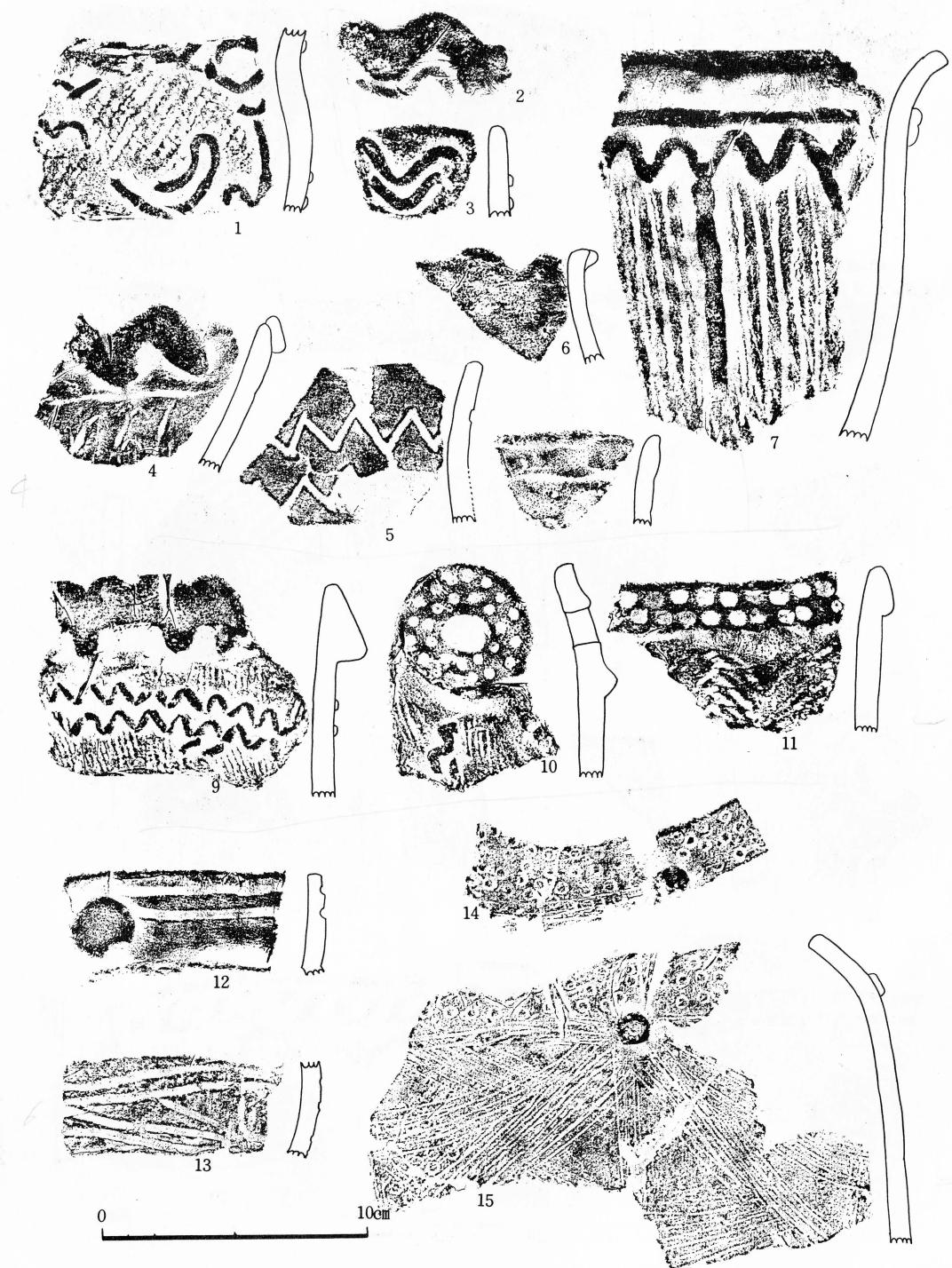
第6図 Cトレンチ壁面実測図



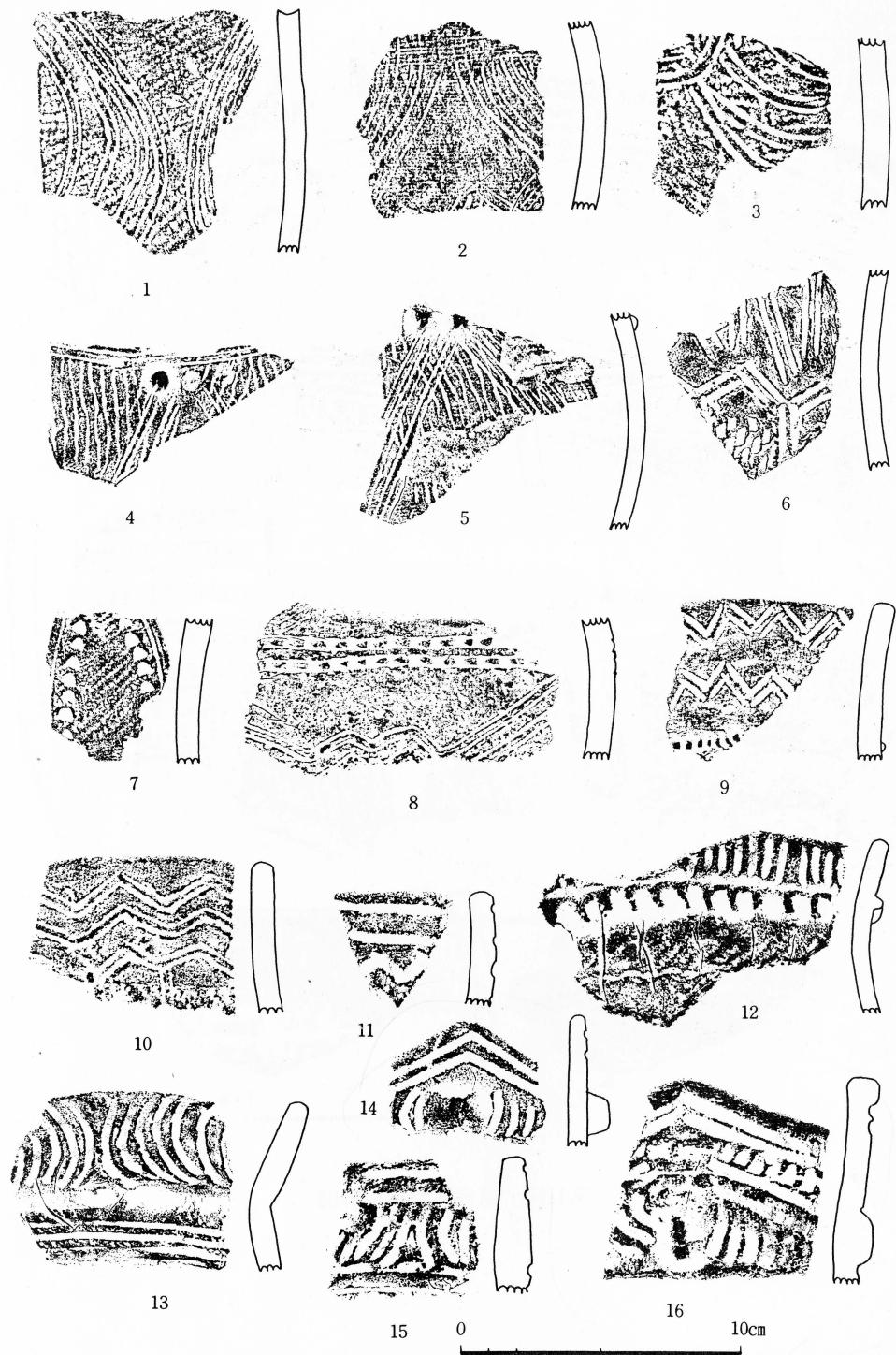
第7図 第1群・第2群土器拓影図



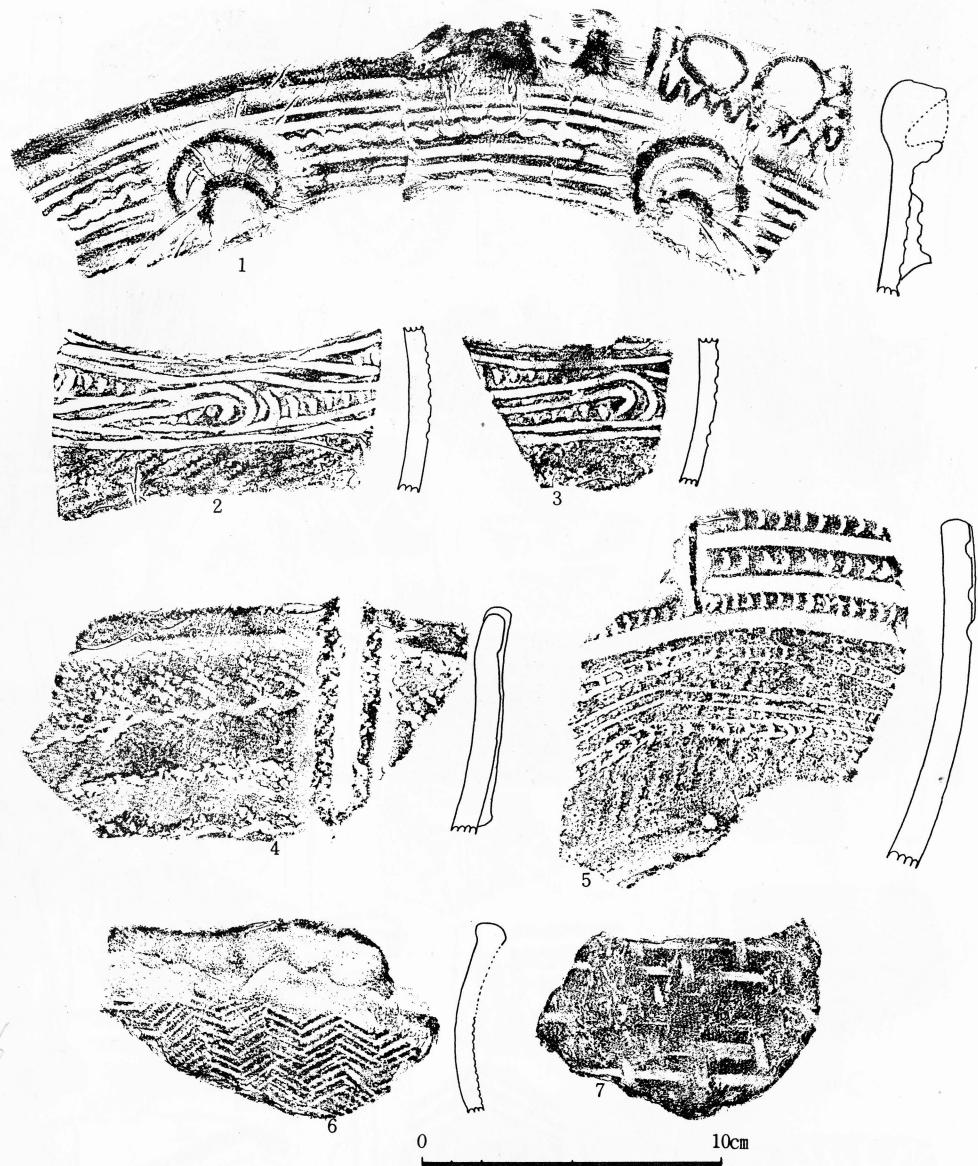
第8図 第2群・第3群土器拓影図



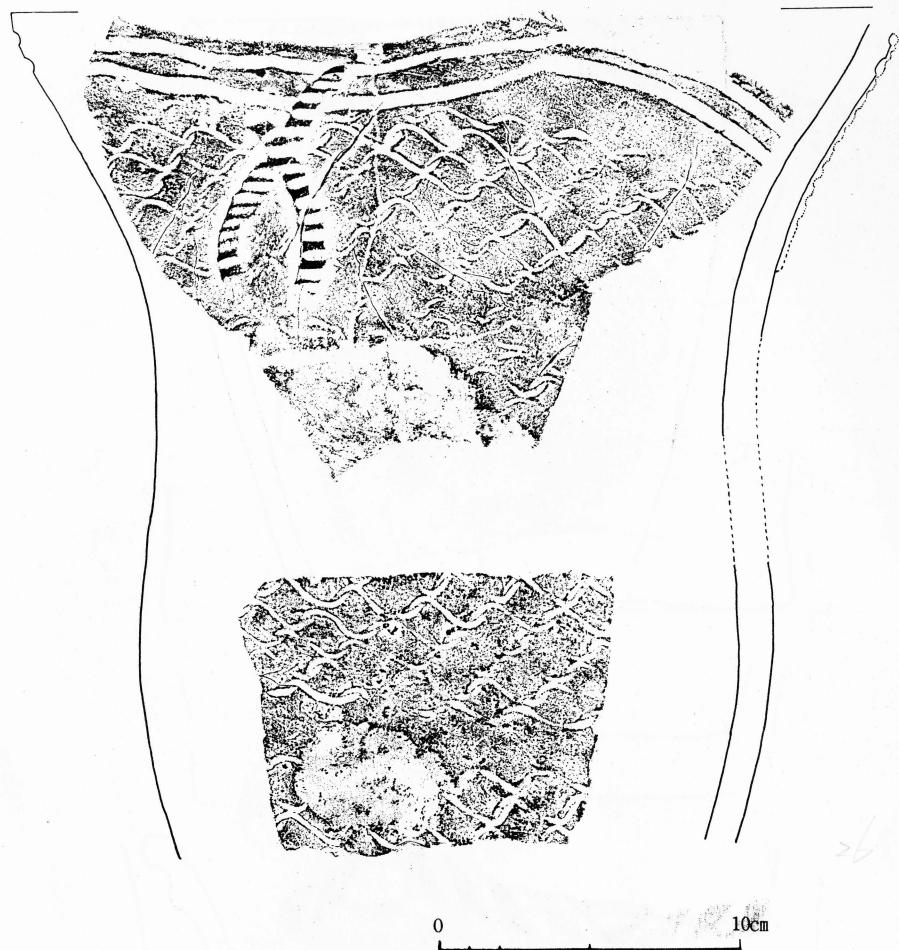
第9図 第4群・第5群・第6群土器拓影図



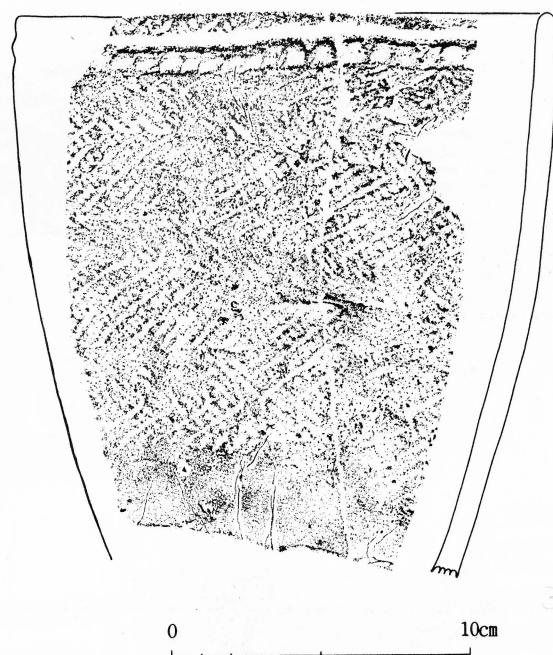
第10図 第6群土器拓影図



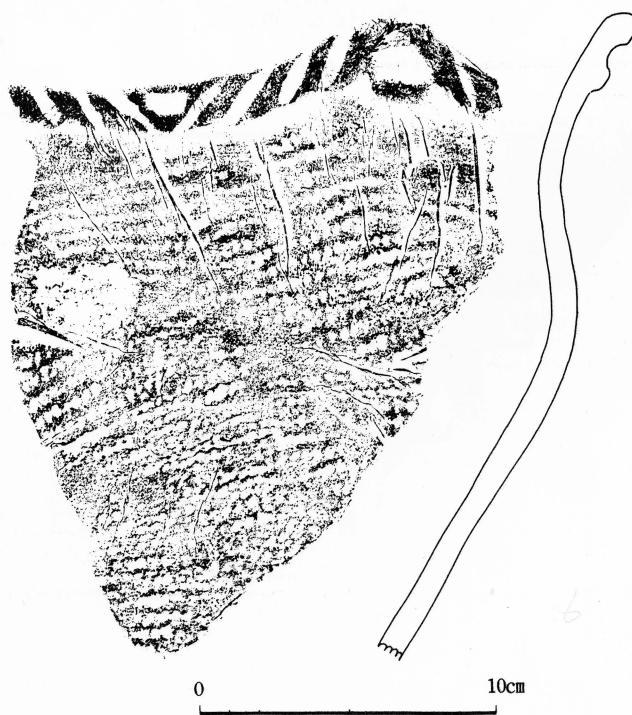
第11図 第6群土器拓影図



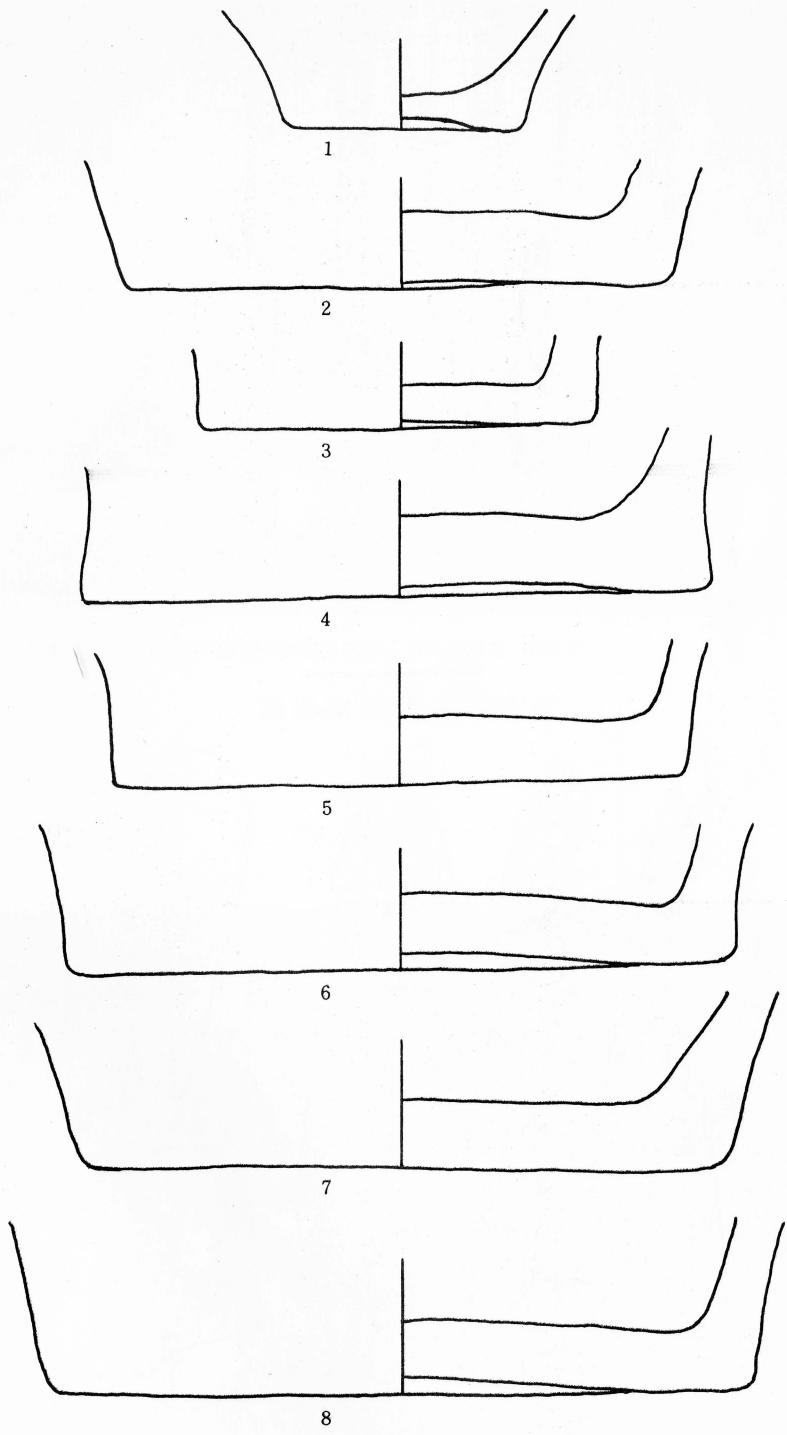
第12図 第2群土器実測図



第13図 第3群土器実測図

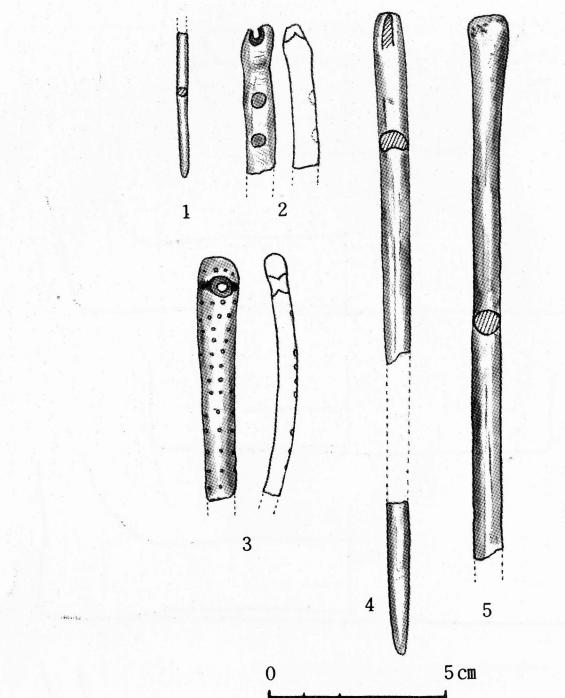


第14図 第6群土器拓影図

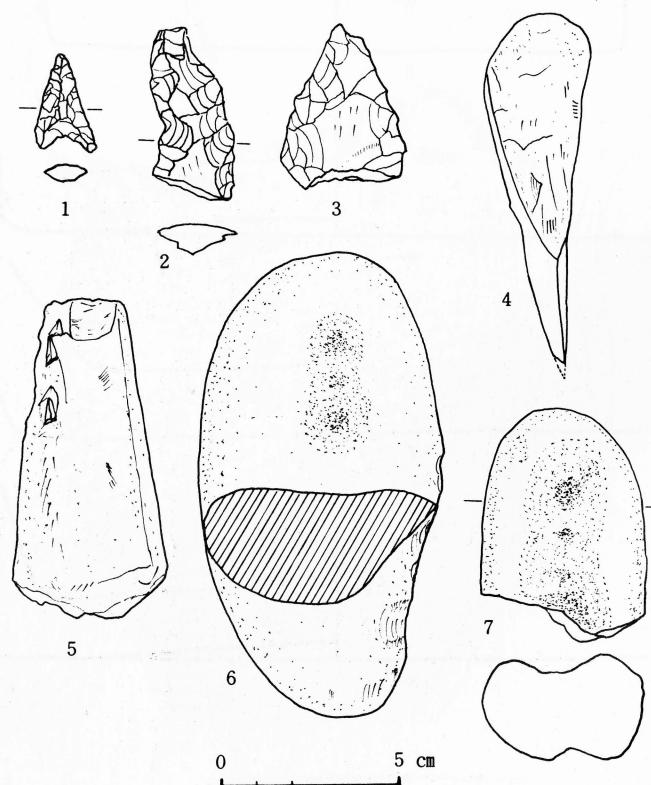


0 5 cm

第15図 底部実測図



第16図 骨角器実測図



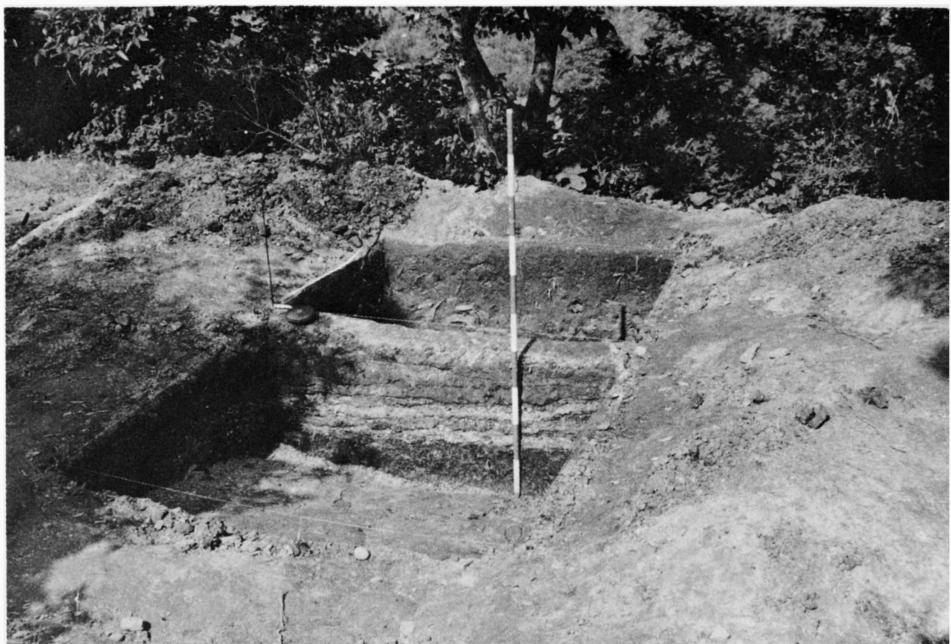
第17図 石器実測図



P L 1 牧田貝塚近景(電信柱の上方の畠、A・B地点)



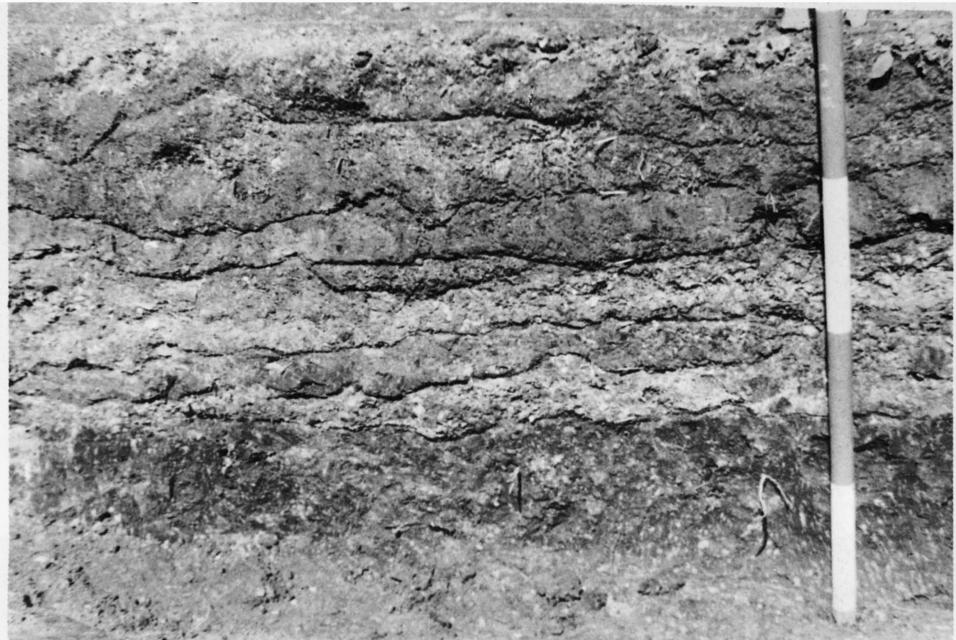
P L 2 A トレンチ発掘スナップ



P L 3 A トレンチ全景(手前がA—I、向こうがA—II トレンチ)



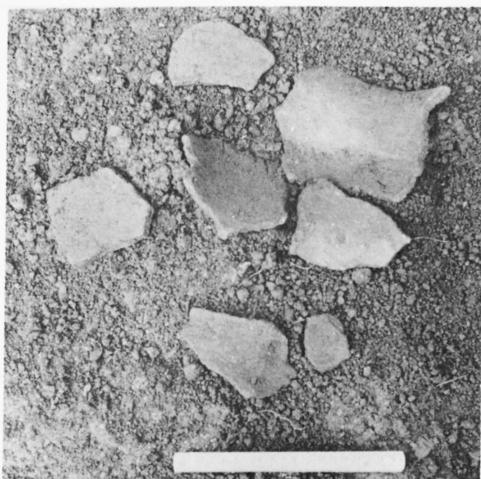
P L 4 A—I トレンチ壁面



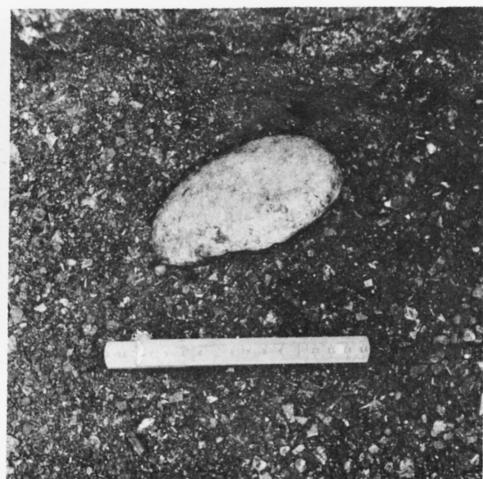
P L 5 A-I トレンチ壁面



P L 6 C トレンチ発掘開始直後



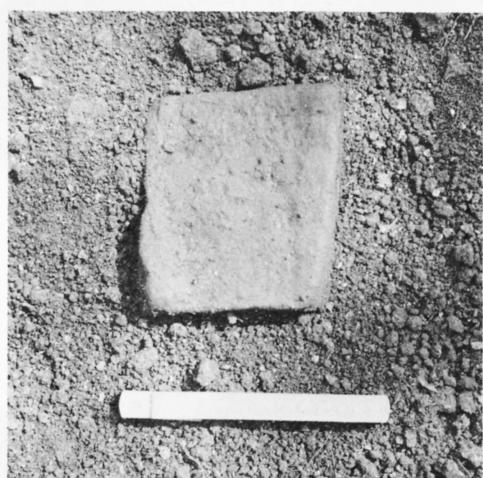
PL 7 土器出土状況
(第6群土器、上方は底部)



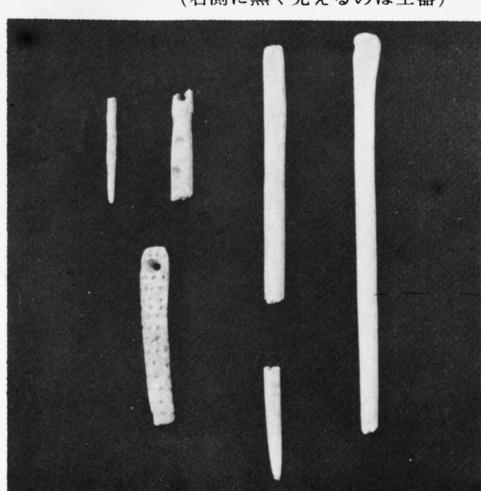
PL 8 凹石の出土状況



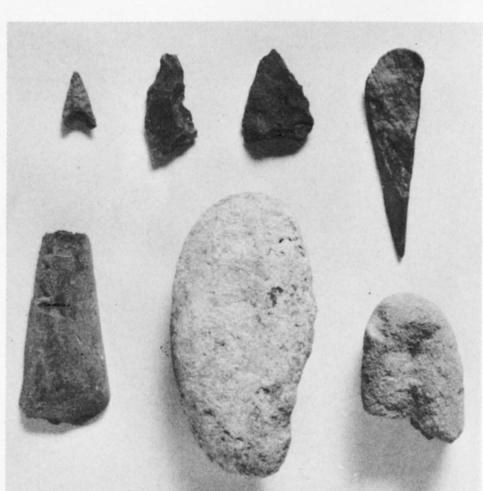
PL 9 骨角器の出土状況
(右側に黒く見えるのは土器)



PL 10 石皿の出土状況



PL 11 牧田貝塚出土 骨角器



PL 12 牧田貝塚出土 石器

高田活版所印刷

